

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	慶應義塾図書館蔵「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻(下)
Sub Title	慶應義塾図書館蔵「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻(下)
Author	松井, 崇(Matsui, Takashi) 三浦, 卓(Miura, Taku)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2001
Jtitle	三田國文 No.33 (2001. 3) ,p.46- 55
JaLC DOI	10.14991/002.20010300-0046
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010300-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応義塾図書館蔵

「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻（下）

松井 崇
三浦 卓

解題

ここに紹介する二通の書簡は、泉鏡花生母すゞから夫である清次に宛てたもので、この二通を含めた四通の清次宛書簡が、慶応義塾図書館に所蔵されている。ここでは便宜上、この四通の書簡に推定執筆順に「書簡一」～「書簡四」と付した。「書簡一」と「書簡二」の二通に関してはすでに、本誌前号（32号）において西川貴子氏によって解題・翻刻されており（慶応義塾図書館蔵「泉鏡花生母すゞの書簡」解題・翻刻（上））。以下、（上）と呼ぶ、本稿はその後編として、「書簡三」と「書簡四」について取り上げる。なお、（上）と重なる解説や注記はなるべく簡略化するように努めたので、適宜、（上）を参照していただきたい。

「書簡三」は、金沢の鏡花生家にいたすゞが高岡へ出稼ぎに行っていた夫の清次に宛てたもので、明治六（一八七三）年六月に書かれたと推定される。この書簡は「書簡一」と「書簡二」に続く一連のものであり、すゞと清次の経歴、および清次が高岡へ出稼ぎに行った経緯などは（上）で詳しく述べているので、

参照されたい。鏡花の出生は明治六年十一月四日であることから、この書簡を書いたとき、すゞは鏡花を身ごもっていたと考えられる。

「書簡四」は、金沢のすゞが東京にいた清次に宛てたものである。清次は明治十四（一八八一）年三月一日から六月三十日まで上野公園内にて開催された第二回内国勸業博覧会に銅製の香炉を出品しており（上）の〈資料一〉参照、その見物を兼ねて、上京していたらしい。鏡花の随想「春狐談」（『太陽』第六卷第六号 一九〇〇・五）の「感應」という章中に、「私が小児の時（中略）田舎に居て、父は博覧会に出品したものがあつた。見物旁東京に出て居た留守、（中略）東京の父から手紙が来て、上野の宿坊に一室借りて居る」という記述があることから、この事が裏付けられよう。また、書簡中に「こゝ元御母様私子とも三人ともま事にそく才にて」とあることや、「とよ春」（後述）という名が見られることから、この書簡が書かれたのは明治十三年一月三十一日の泉豊春出生（殿田良作「泉鏡花の実際

と作品」「国語国文」一九六三・七（による）以降のことであり、以上の条件から考えて、この書簡が書かれたのは明治十四年七月のことであると考えて、ほぼ間違いないだろう。前掲の随想にあるように、この父清次の上京にともなう一連の出来事は幼い鏡花に強い印象を与えたと思われ、その当時の鏡花をめぐる状況の一端を知る上でも、この書簡の持つ意味は大きいであろう。ちなみに、すゞは翌十五年十二月二十四日、満二十八歳で亡くなっている（殿田前掲論文）。

書誌

翻刻にあたって、慶応義塾図書館所蔵の清次宛すゞ書簡四通に、便宜上、日付順に「書簡一」～「書簡四」と番号を付した。今紹介するのはそのうちの「書簡三」と「書簡四」である。

〔書簡三〕

- ・〔明治六年（推定）〕六月二十九日
- ・巻紙、薄手斐楮交漉二枚継
- ・（縦×横）十五・三×七十・四（cm）
- ・墨筆（三十六行・別に差出人署名、宛先、日付共六行・「猶々書」十七行）

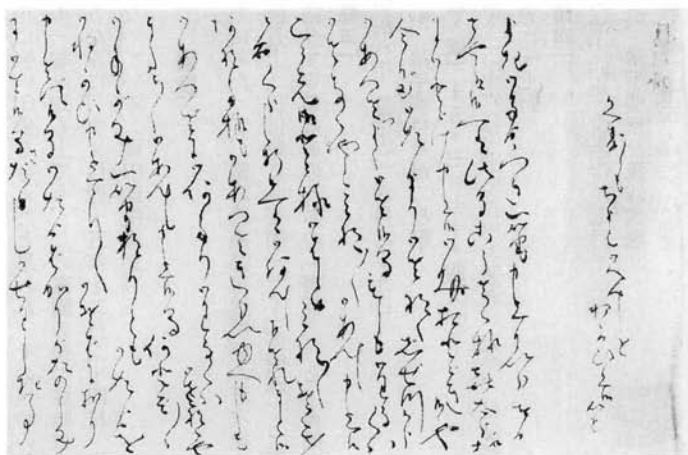
〔書簡四〕

- ・〔明治十四年（推定）〕七月十三日
- ・巻紙、薄手斐楮交漉四枚継
- ・（縦×横）十五・〇×八十一・六（cm）
- ・墨筆（五十三行・別に差出人署名、宛先、日付共五行・「猶々書」十四行・別に差出人署名、宛先共四行）

凡例

一、翻刻にあたってはできるだけ原文に忠実であるように努め、書簡特有の文字（例…「*h*」）は原文のままとしたが、変体仮名は原則として通行の仮名に改めた。

一、本翻刻は〈書簡写真版〉〈本文翻刻〉〈注〉により構成されている。



翻刻

「書簡三」

かへすくもちよと御へんしをねかひ上候 以上
よき御た方につき一筆申上まいらせ候
さやうに候へは此間こうさく様喜太郎様
に御とゞけ申上候³文相とゞき候や
今でも御たより御さなくじせつから
御あつさつよく御さ候間もしも御わるくは
御さなくやとみなく御あんし申上候
ここ元御とゞ様御はしめみなくそく才
にてくらし折候へは御あんし下されましく候
あなた様も御あつさきらいゆへもしも
御あつさに御あたり御わるくは御さなくや
ま事にく御あんし申上候間何とぞく
御手がみ一筆なりとも御た方を
御ねかひ申上まいらせ候御そばにおり
申さず候間御た方ばかりがたのしみ
に御さ候間さだめし御せわしき御事



とは山く御さつし申上候へとも御た方
か御さなく候こといろくつまらぬ
事までくろふに相成申候間とうぞく
御た方くれくも御ねんし申上まいらせ候
沢だや様にも今日上にあかくらやへ
まずくとうぶん御かりたくに御ひき
こしに御さ候ますく御あんしん被下へく候
だんくあつさとは相成候しま事にく
うれしく御さ候

一此間方たひく申上候中むらの事

いかゞに候やもしもしらすきやにいらなく
候はばいづれにてもよろしく候と此間

よりたひくまいり申候間御いそがしき
御なかなから御ねかひ申上候と申候間

とうぞく何とか御へんしをねんし上候
何とぞ御わるく御なり遊し候らわぬ

よう御あつさ御ようじん遊し候やう
くれくもねかひ上まいらせ候何もく

御きげんうかひ度一筆申上まいらせ候
あらくめて度かしく

六月二十九日

しん町

たかおかにて

すゝ方

清次様

御もとへ



猶く時かうせつかく御いとゐ遊し
御たべ物御よふしん遊し御そく才のよう
御ねかひ申上候とうそく御へんし一筆
なりとも御ねかひ申上まいらせ候すへなから
御かゝ様⁽¹⁰⁾方もせつかくく時かう大しに
なされ候やうにとくれくも御申に御さ候
二かひ両⁽¹¹⁾しん方もよろしくく申上候やう
申きけまいらせ候とうそくらい月
中ころまでにはちよとなりとも
御かへり被下へく候此度はしろくて⁽¹²⁾
よろしく御さ候間後あんしん被下へく候
何事も御目もしにて御はなしゆるく
申上まいらせ候何もくあらくめてたくかしく
また申上候ここ元御くすりにても
何にても御ほしき物候はば御きがね
なく御申よこし被下へく候くれくも
御そく才のようねかひ申上まいらせ候

御事と御心の内山く御さつし申上候こゝ元にも
 御母様はしめ私事も事にく御あんし申上候
 どうかよき御た方御さ候ようにと日ゝ
 ほうくへま入申候こゝ元なぞも事にく
 ふけつきにて御さ候よしみなくはなし申候
 とうそくよき所へきまり候やうにと
 御さばり申上候もはや明日は大こしに
 候へともあなた様御るすゆへま事にく

「書簡四」

御きけんうかゝひ度一筆申上まいらせ候
 おい〱御あつさつよく相成候所まつ〱
 あなた様にも御きけんよくいらせられ候御事
 何ち〱御目出度うれしく御よろひこひ
 申上まいらせ候つきにこゝ元御母様私子とも
 三人ともま事にそく才にてくらしおり
 候間かならず〱御あんしん被下ましく候
 さやうに候へはあふ方ほんまへには御かへりと
 御た方お今日は〱と御まち申上候所
 八日よる十時てんしんま入品物¹³今だ
 御きまりに相成候はぬよしそれゆへ
 ほんすきに成候よし御申よこし
 あなた様もさそく御しんはい様の
 御事と御心の内山く御さつし申上候こゝ元にも
 御母様はしめ私事も事にく御あんし申上候
 どうかよき御た方御さ候ようにと日ゝ
 ほうくへま入申候こゝ元なぞも事にく
 ふけつきにて御さ候よしみなくはなし申候
 とうそくよき所へきまり候やうにと
 御さばり申上候もはや明日は大こしに
 候へともあなた様御るすゆへま事にく



さむしく〜こまり入候きりこも相かわらず
どこへもかへもみな〜おさめ申候
はらいもこまかいのはやり候つもりに御さ候
こゝ元の事はかならず〜御あんし被下
ましく候この町方もお食半方ほとま入申候
もりちかさんの所へもたのみおき候ゆへ
ま入候事とまちおり候何事もけして〜
御あんし被下ましく候此日両日まへ方
こゝ元ま事に〜御あつさつよく相成申候
さだめし其御ちも御あつさ御ひどき
御事と御さつし申上候とうそ〜御わるくは
御成遊し候らわぬよう御ようしん御ね
かい申上候かたびらか御さなく候て
猶〜御あかたうと山〜御さつし申上御つがう
よろしく候はば御こしらへ遊し候ようねかい上候
御品物方付候は、一日も御はやく御かへり遊し
候ようねんし上候子ともみな〜たのしみ御まち
申上候加納も今月三日方しごとに入申候
竹まもまい日ま入申候い〜さん事まいばん
相かわらずよなべにま入申候よろしく〜
申上候やう御申に御さ候あなた様品物の
事ま事に御あんしにて日〜御うわさのみ
御申に御さ候御たちの日が相しれ候はば



ちよと御しらせ被下へく候みなく御むかへに
ま入候と申おり候間御ねんし申上候
すへなから水の様(2)したら様(2)へもよろしく
御申上下されへく候こゝ元ちゝ事も
よろしく申上候よう申きけ申候
まつはほんの一筆あつき御見まいまてに
あらく申上まいらせ候何もくあと方
ゆるく申上候
目出度かしく

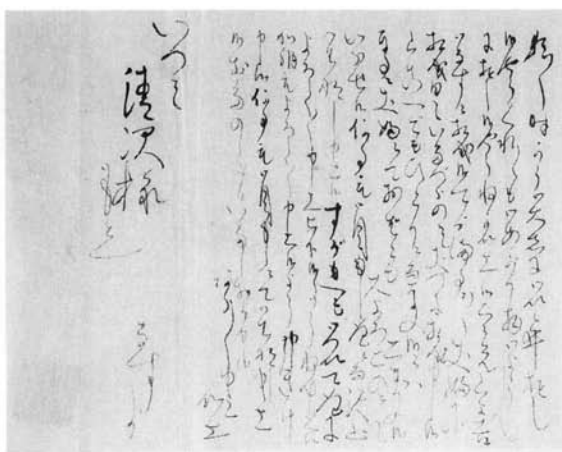
七月十三日

すゝ方

東京にて

清次様

御もとへ



猶く時かう御大しに御いとみ遊し
 候やうくれくも御あがり物御ようしん
 に遊し候やうねかい上候こゝ元とよ春⁽²⁾
 御るすに相成候て方ま事にく丈ふに
 相成日にいたづらのみ丈づに相成申候
 とこへでもひとりにてま入候にはこまり入候
 ま事に丈ふにておばゝも大よろこひにて
 いらせ候何事も御目もし様にて沢山
 御はなし申上候すがもへも御ついで様に
 よろしくく申上被下候ようねんし上候
 加納もよろしくく申上候よう申きけ
 申候何事も御目もしにて御はなし申上
 候おたのしみにいたしおり申候
 あらくく申上以上

いつみ

清次様

御もとへ

るす方

注

- (1) 「こうさく様」…清次と共に高岡へ出稼ぎに行っていた加賀象嵌師
山川孝作のことであろう。(上)の注(3)参照。
- (2) 「喜太郎様」…清次や孝作と共に高岡の白崎屋へ出稼ぎに行っていた水谷喜太郎のことであろう。(上)の〈資料2〉〈資料3〉注(8)参照。また、第二回内国勸業博覧会に銅製の花瓶を出品しているのも同一人物と思われる。(上)の〈資料1〉参照。
- (3) 「御文」…(上)で紹介した「書簡二」のことか。
- (4) 「御と、様」…清次の父、泉庄助(「庄次」とする論文もある)のこと。
- (5) 「沢だや様」…清次の姉ますの嫁ぎ先である金沢南町の蠟燭商のことであろう。「書簡一」「書簡二」にもその名が見られる。(上)の注(2)参照。
- (6) 「あかくらや」…未詳。
- (7) 「中むらの事」…「書簡一」「書簡二」にもたびたびこの記述が見られるが、未詳である。
- (8) 「しらさきや」…高岡にあった銅器商の間屋白崎屋のこと。清次は明治六年三月からここへ出稼ぎに来ていた。(上)の注(8)参照。
- (9) 「しん町」…鏡花の生家は、金沢市下新町二十三番地(現、金沢市尾張町二百十二ノ一)にあった。
- (10) 「御か、様」…清次の母、泉きてのこと。
- (11) 「二かひ両しん」…すゞの両親、中田豊喜、ちよ、のことか。「書簡二」にも同じ記述がある。(上)の注(18)参照。
- (12) 「しろくて」…未詳。
- (13) 「品物」…未詳。清次は博覧会見物と仕事を兼ねて上京していたことも考えられる。
- (14) 「ふけつき」…未詳。
- (15) 「大とし」…未詳。
- (16) 「お食半」…未詳。
- (17) 「もりちかさん」…未詳。
- (18) 「あかろうと」…未詳。

(19) 「加納」…未詳。

(20) 「竹ま」…未詳。

(21) 「いくさん」…未詳。

(22) 「水の様」…八代目水野源六のこと。

(23) 「したら様」…未詳。

(24) 「とよ春」…「とよ吉」とも読めるが、鏡花の弟、泉豊春のことであろう。豊春は後に泉斜汀と号し、鏡花と共に硯友社の作家として活躍した。

(25) 「おぼ、」…泉きてのこと。ちなみに父庄助は明治七年十一月十六日に六十九歳で没している。

(26) 「すがも」…未詳。

〔訂正〕

(上)の注(11)に「鏡花の生家は石川県金沢市下新町三十三番地……」とあるのは、「……下新町二十三番地……」の誤りです。この場をかりて訂正させていただきます。

〔謝辞〕

本資料の掲載を快諾して下さった、ご遺族の泉名月氏、および慶應義塾図書館の関係各位に心から御礼申し上げます。